



四季  
部類

依時菜時記新菜草

冬











部類 俳諧 時記 新稿

西子の子の... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

武江... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

羊まの... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

て是の... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

ハ百... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

四季... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...

世人... 西子の子... 瘦き如作... 灰拵... 日何りの... 時香... 入木の...



















秋の月... 月三十日

あつ... 月三十日... 秋の月... 月三十日

あつ... 月三十日... 秋の月... 月三十日

夏草式... 此の草を古抄より...

埋火... 埋火の字を...

口切... 口切の字を...

兼三冬物 懷爐... 兼三冬物の字を...

芝債... 芝債の字を...

野... 野の字を...

角鷹... 角鷹の字を...

兼三冬物 山眠... 兼三冬物の字を...







部類 伊勢 崇時 詠新 歌集

廣庭一奉うへし 極る子 笑 州  
とものこ 養子 さらさら 嘆き けり 一 橋  
そのこころ かく けり けり けり 一 橋  
うしろ さらさら 嘆き けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋  
まのこころ かく けり けり けり 一 橋

何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋  
何のこころ かく けり けり けり 一 橋

四季 非 考 成 時 記 所 在 宜

蕪三冬物 華膺魚 老鯉魚 鯉魚 鯉魚

蕪三冬物 華膺魚 老鯉魚 鯉魚 鯉魚

網代 網代寺 魚沼 魚沼 魚沼

霞 玉珂 曾子 曾子 曾子

山茶花 山茶花 山茶花 山茶花

切干製 切干製 切干製 切干製

維摩會 維摩會 維摩會 維摩會

雪 雪 雪 雪

六の花 六の花 六の花 六の花

七 七 七 七

七 七 七 七

親も子もあはれ 飲もれ極の酒 傘下  
人さあはれ 舟もはたけ 友重  
ゆきゆき 雪もあはれ 舟もはたけ  
ゆきゆき 雪もあはれ 舟もはたけ  
ゆきゆき 雪もあはれ 舟もはたけ  
ゆきゆき 雪もあはれ 舟もはたけ

初夏  
あつちやうの物 傘下のつら  
あつちやうの物 傘下のつら  
あつちやうの物 傘下のつら  
あつちやうの物 傘下のつら  
あつちやうの物 傘下のつら

宵船 老人のまはれし  
山さか 山さか 山さか  
山さか 山さか 山さか  
山さか 山さか 山さか  
山さか 山さか 山さか

女まて 女まて 女まて  
女まて 女まて 女まて  
女まて 女まて 女まて  
女まて 女まて 女まて  
女まて 女まて 女まて

日付もあつちやうの物  
日付もあつちやうの物  
日付もあつちやうの物  
日付もあつちやうの物  
日付もあつちやうの物

菴の夜もあつちやうの物  
菴の夜もあつちやうの物  
菴の夜もあつちやうの物  
菴の夜もあつちやうの物  
菴の夜もあつちやうの物

仲夏  
仲夏 仲夏 仲夏  
仲夏 仲夏 仲夏  
仲夏 仲夏 仲夏  
仲夏 仲夏 仲夏  
仲夏 仲夏 仲夏

四季 仲夏 仲夏 仲夏  
四季 仲夏 仲夏 仲夏  
四季 仲夏 仲夏 仲夏  
四季 仲夏 仲夏 仲夏  
四季 仲夏 仲夏 仲夏

韓氏外傳 丘草木の花より五出 雲花 六出 朱子語

雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴

雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴

雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴

雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴  
雪の聲 新撰朗詠 若庭木落紅無飾 雲確月晴

物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥

物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥

物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥

物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥

物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥  
物 廣雅 雲の雨 水鳥 浮海鳥



連句のついでに法を述べた文  
引立てるものもある清なる系  
かたはははるるを法を述べた  
直垂をぬぐは法を述べた  
中かしの幕をぬぐは法を述べた  
物種を述べた法を述べた  
法の花をぬぐは法を述べた

初秋

さくらも花も並列の秋の風  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋

秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋  
秋の風もさくらも並列の秋

四季 作古 我 時 七 新 天 草

鶉

鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て  
鶉の鳴き声は朝霧の音に似て

兼二冬物 氷魚

氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て  
氷魚の味は冬の味に似て

水魚の使

水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て  
水魚の使は冬の味に似て

冬旬

冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て  
冬旬の旬は冬の味に似て

世捨又後

世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て  
世捨又後の世は冬の味に似て

冬物

冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て  
冬物の味は冬の味に似て

杉焼

杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て  
杉焼の味は冬の味に似て

炭

炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て  
炭の味は冬の味に似て

部類 伊詩 荒氏 詩 病 天 草

斧のきり 鳩のつら 秋のうら 一 雙  
藤のきり 人のあそび 夕のうら 一 雙  
田の畑を 汗を流し 水がわがし 一 雙  
山越え 馬を引つら きて 秋のうら 一 雙  
初詣のうら たる 秋のうら 一 雙  
去のうら たる 秋のうら 一 雙  
昔のうら たる 秋のうら 一 雙  
日々のうら たる 秋のうら 一 雙

豊秋

何となく 桂しる 葉のうら 一 雙  
去のうら たる 秋のうら 一 雙  
山のうら たる 秋のうら 一 雙  
一となく たる 秋のうら 一 雙

初冬

今初に 初冬を たる 秋のうら 一 雙  
やした たる 秋のうら 一 雙  
一となく たる 秋のうら 一 雙  
初詣のうら たる 秋のうら 一 雙  
みの申す たる 秋のうら 一 雙

奮十月

應鐘 立冬

陽月、良月、玄冬、秦正、初冬、時る月、初冬

十月

寒、赤間祭、赤間祭、赤間祭

十一月の平川祭

上酉日 夏の十一月の

の葉を たる 秋のうら 一 雙

長して三四尺 葉をたる 秋のうら 一 雙  
してを たる 秋のうら 一 雙  
しとなく たる 秋のうら 一 雙  
初詣のうら たる 秋のうら 一 雙  
大魚と たる 秋のうら 一 雙

常祭

公事 撰選 今年の初詣を 神と たる 秋のうら 一 雙

新玉

毎のを 新玉 たる 秋のうら 一 雙

波島焼

後成 波島焼 たる 秋のうら 一 雙

泉のうら たる 秋のうら 一 雙

報恩講

御佛事 たる 秋のうら 一 雙

八日にて 報恩講 たる 秋のうら 一 雙

とを 報恩講 たる 秋のうら 一 雙

月廿八日 報恩講 たる 秋のうら 一 雙

戸在 報恩講 たる 秋のうら 一 雙

冬至

朔旦冬至 たる 秋のうら 一 雙

四季 作 たる 秋のうら 一 雙

七部集 十一月 二百十一



















舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

舟の東に豆すしを備ふ 陸陸  
舟の西に豆すしを備ふ 陸陸

を修む神人一人これに從ふ  
今正月廿九日行法を自し

山忌 廿二日大徳寺の山忌  
今日再山大燈國師の忌

大燈國師行状云師諱妙超字宗峰  
西縣生を初氏の子女母報者六士之禱

鯛味噌 鯛味噌は肉味噌と同し  
鯛味噌は肉味噌と同し

敷 敷は常分の夜画船を白紙に貼り  
敷は常分の夜画船を白紙に貼り

追儼 鬼やらぬ 周礼方  
追儼 鬼やらぬ 周礼方

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱

な長崎の柱 長崎の柱は長崎の柱  
長崎の柱は長崎の柱







世宗河宗正十家集

世宗河宗正十家集

世宗河宗正十家集... 世宗河宗正十家集... 世宗河宗正十家集...

十二月 大雪節 大破 三十日 冬至中 大破 三十日 十二月 大雪節 大破 三十日 冬至中 大破 三十日

四季 俳諧歲時記新撰草附録

俳諧之字義

史記滑稽傳注姚察云滑稽猶俳諧也言諧語滑稽其知計疾出故云滑稽也... 俳諧之字義... 俳諧之字義...

俳と誦と通せしものありしと之を言ひ尋ねるるに  
世説の本文に侯白母俳誦と云ふ、俳誦一笑七之巻  
小引の末に俳誦と云ふは誦ハ俳誦誤あるとて微し  
支考より十論の道蕉家の書法に人偏の俳誦を用ふ  
るしといへるも據あり

俳諧之連歌權輿

詩家之俳諧体ありて和歌之俳諧体をも亦  
亦たまに依ひて連歌亦俳誦体ありて俳諧連歌  
の始なり詩六之俳諧体  
小引あり筑波問答に云伊井諾尊伊井丹  
尊は一巻に之のすくをい乃時伊井諾尊伊井丹  
也る俳しおやぬと云ひぬといふは伊井丹のこゝろ

あなをすまじし言やうぬしあやこふ何れぬくこたへたぬふ  
是連歌のけし免と也或ハ日本武尊東夷征伐の時  
甲斐の國酒打の宮より、珥比磨利菟久波平領擬  
底以久用加祢菟流、と何そをいれり、此は神代卷の  
もよおし書り  
加感奈陪底用珥波虚々能用比珥波菟鳩、と付り是  
連歌のけし免と云ふは、賜答の言を、  
文字は、  
すまじあはぬ言を、  
いりて、  
連歌の  
けし免と  
いふは、  
大伴宿禰家持  
所誦、  
尾積末句等、  
一首  
修保川之水平塞上而植之田平 尾作

荊流早飯者独坐信思 志持續

是連歌のけし免と云ふは、  
一作者を二名あるも、  
一首あり、  
然るに、  
今の連歌ありし



山吹の五文字を冠し免むくにあまのあはれは  
吟古池のさすいすまのいづこ此白の自己の眼をみまの  
影の山風の一派のりは別々新とそ

佛結書時記

寛永二十五年十二月五日

松平貞徳洛陽妙法寺本文坊  
於て佛結の文字を立是佛結の式を定る鼻祖也  
之るくハ歌と樂之事あり申樂之佛結ハ今ノ  
多原ハ此ノつあまもも新古のまろハある羅文  
道ノ如ク遠方ノ神道ノまろハ佛結ハ佛法ノ似  
此言大ニあるをハあ理云

詩三極句狂歌等書るるハ佛結体ニテ例二三を掲ぐ

雨傘一怨明

有情、巾、葉、意、思、情、系、伴、巾、伴、巾、重、衣、爲、海、無、衣、衣  
在、巾、情

燈輝吹中明

以、朱、唇、粉、添、新、玉、鏡、斜、遙、看、烟、裡、面、大、似  
霧、中、花

夫以盜牛犯罪書上縣尹詩

洗面盆、爲、鏡、梳、頭、水、煮、油、毒、身、飛、穢、女、交、例、言、掌  
牛

佛結体和歌

古  
秋のまの母道したまふ多女はあつるまのこはまてまろくまの  
秋風れはるるのぬらし着袴つまきまてての義のくもまろく

俳諧之大意

俳諧の名ハ史記は滑稽傳より古今集にけしきを連  
 歌よりつらまうより宗鑑を茶の守武を学ひ俳諧の詞を弘  
 まるるれと一燈の真なりを撰じて今の俳諧の源情はつら  
 且  
 俳諧の心を傳へる人あまたある芭蕉の意は俳諧古人はし  
 らそしむを奉りて人よりさう中さう字訓乃趣文とあるありぬ  
 中興する俳諧の心とて虚実の自在なる世間の理屈を放  
 き風雅遊心を云ふ落し余らるゝ世情の人知るる五倫の世法  
 ことごとくあつてまゝ俳諧の名と習へく俳諧はこれに類する  
 道し人々々々此三ツをあるはハ身重の羅漢を誦するも薦  
 一牧のたまををわきまきけいハ八珍の菓者をけいぬも一瓢の飲  
 の樂ををわきんせ上の意を知りて笑言を身におきしむる

俳諧自在の人とのあはれしむるは世に多しこやいやに  
 ますくもく俳諧の心は時を産を破るも業を怠る  
 とくもくもく世法の一助なるべし

終七 銅四鉄耕

世に依世書多し一と一と入る如題注釈の最も  
 良撰多るを歳時記亦然りと實に依家の禁州初学  
 の中よりとと多し程判者あるら作例を求むる事  
 多きと七部集年倚きりて流を流せし歴世を嗣  
 子明治の今にこれの男依世の纂冊少からん然  
 中一書札梅言或も及漢のをも存新本又も東武  
 有るもの宗匠を他西への風士ら集るる著るに新  
 しき風体をも後をも初学の階梯とあるに  
 此道乃ちま実なる書も又多く採りしに彼の著  
 記を幹としし四季部類なる案さるる教纂古今名  
 の書を採りて此にまま著るに雅字我れをせは也と

鍾風月虫の何し此編を需めり然り聖史法を記  
 を願古往く在し以て新葉草とて計廻向誠耕  
 のも然りあるもの志す則ち之を一点の地書を不採真  
 た驚ししものままは博覧の君子とて相漏を恐  
 福言て誠語し賜す幸甚之と志す也

明治十五年三月

對川舎 素 楊 後



明治十四年十二月廿四日出  
同 十五年二月四日版權先許  
同 辛六月刻成發兌

定價金七拾五錢

京都府平民

編輯者 山口 素 楊



下京區茅六組大黒町  
三拾四番地

京都府平民

出版人 風月 莊九衛門



上京區第廿八組大恩寺町  
貳百四十八番地

支那四條通西側院西  
町二丁目山口東三郎

